

平成28年度 第1回 加齢研 生化学セミナー

6/30(木)16:00—17:10
@実験研究棟7F セミナー室(1)

16:00—16:30

腫瘍生物学分野 吉野 優樹 先生

中心体制御不全による発がん
～中心体制御不全モデルマウスとしての*Ola1*KOマウスの解析～

中心体は細胞分裂時に形成される紡錘体の形成基点となり、染色体分配の正確性を向上させている。多くのがん、なかでも乳癌では早期から染色体不安定性と中心体数の異常増加を認め、発がんに中心体制御不全が関わっている可能性が疑われている。我々は遺伝性乳がん卵巣がん症候群の原因遺伝子産物であるBRCA1に依存的に中心体を制御する新規因子として、OLA1を同定した。興味深い事に、OLA1の発現異常は乳癌細胞株においてのみ、中心体数の異常を引き起こした。このBRCA1/OLA1による中心体制御系の発がんにおける役割を解明するため、*Ola1*ノックアウトマウスを作成し、自然発生した腫瘍の解析を行っている。本セミナーでは、*Ola1*ノックアウトマウスの解析から中心体制御不全と発がんの関係を考察したい。

16:30—16:40

コーヒーブレイク

16:40—17:10

遺伝子導入研究分野 乾 匡範 先生

全身性エリテマトーデスに特徴的な免疫制御受容体の解析
～自己抗体産生の制御を目指して～

全身性エリテマトーデス (Systemic lupus erythematosus, SLE) は抗体産生細胞であるB細胞の制御機構が破綻し、抗核抗体などの病原性自己抗体が異常に産生されることで誘発される自己免疫疾患である。患者数は年々増加傾向にあり、その治療法としてステロイドや免疫抑制剤、B細胞を標的とした抗体療法などが選択されるが、感染症など重篤な副作用が認められることから、病原性自己抗体産生B細胞を特異的に制御する方法の開発が待たれる。本セミナーでは、SLE患者由来末梢血B細胞における免疫制御受容体の発現解析により明らかとなった、抗体産生B細胞であるプラズマブラスト特異的なLILRB4の発現と自己抗体産生との関係、さらにSLEなど自己免疫疾患の治療標的としての可能性について紹介したい。